

踏査のNPO 法人がツアー 景色楽しみ 肝煎から添川へ



清河八郎は1847(弘化4)年に16歳で学者を志して家出し、江戸へ向かった。藤沢周平の小説「回天の門」には、八郎が庄内町肝煎から槇葉山に入り、山伏峠を越えて鶴岡市添川に出た様子が描かれている。

「まちネット」は八郎が出

清河八郎「回天の道」

庄内町出身の幕末の志士、清河八郎が家出して江戸を目指したルートをたどる「清河八郎・回天の道」文学散歩の旅」が7日、同町などで行われ、東京のNPO法人「元氣・まちネット」(矢口正武代表＝戸沢村出身)の踏査を基に復元した峠道を歩いた。

復元の峠道を歩く

奔じた際の県内ルートを「回天の門」を手掛かりに、おとしと昨年2回に分けて踏査。肝煎―添川の峠道を確認したが、肝煎側は倒木や草に覆われ通れなくなっていた。昨年6月、地元約20人がチェーンソーや草刈り機を持ち込み、この道を復元整備した。

ツアーは「まちネット」が企画し、庄内地方を中心に県内外から約30人が参加。剣道着を着て八郎の姿をまねた町職員小林重和さん(45)を先頭に肝煎を出発した。

峠道に入ってすぐの曲がりくねった「一の坂」やそれに続く「二の坂」「三の坂」はやや急だが、そこを過ぎると緩やかな坂に。杉やコナラ、カラマツなどの樹間を通る道の所々で山桜が可憐な花を咲かせていた。出発から約1時間40分で、峠付近の添川側に広場が整備されている展望台に到着。庄内平野や鳥海山、月山などを一望できる雄大な景色を楽しんだ。

八郎に扮した小林さんは「この道は紅葉シーズンなども美しい。整備しながら大事に守り、観光資源として売り込んでいきたい」と話した。ツアーは日帰り1泊2日の2コースあり、2日間コースはきょう8日、鶴岡市の藤沢周平記念館などを訪れる。

「一の坂」を過ぎた地点で植物などの説明を受ける参加者

庄内町